

リレーコラム

食文化の本質と日本における
乳文化の現状

ここ最近、フランスにおける農村振興制度を現地調査できる機会に恵まれたことと、TPP（環太平洋経済連携協定）締結による日本酪農への影響を酪農関係者と議論していることを契機として、「食文化」の重要性を初めて考えるようになった。今までの自分が非常識だったのだろうが、指定団体制度や原料乳取引を対象とした研究をしてきた筆者にとって、食文化はそれまであまり重要でない概念であり、これからの日本の酪農乳業を展望する上でも、そういった視角からほとんど考察してこなかった。しかし、特に消費者の食行動を把握する際、食文化を抜きに考察することはできないと思いつつようになってきた。

石毛〔1〕によると、食文化とは「人びとの食物に関する観念や価値の体系」であるという。食物は、人間の空腹を満たす単なるモノではなく、食という極めて社会的な営みを通じて形成される食文化の産物である。そう考えると、現在の状況は、食物のモノ化＝商品化が際限なく進行しており、食物とその背景である食文化との乖離が進んでいると指摘できる。消費者意識における食物のモノ化それ自体も食文化と言えなくもないが、それはむしろ食文化の頹廃であろう。

本稿では、この食文化に関係する以下の2文献、秋津〔2〕と柏〔3〕を紹介したい。

まず、秋津〔2〕は、消費者の大多数はすでに食の知識や行動における「地域的共有」を失い、個別の選択を積み重ねた「独自」の食行動を取るようになってきていると指摘し、この状況を指して「食生活のタコツボ化」と表現している。そのうえで、食行動が意識化される時、2つの方向があると述べる。すなわち、自らの身体に向かう方向と、身体をとりまく自然・社会環境に向かう方向である。例えば、おいしいから・健康によいから食べるのが身体に向かう方向であり、農家を応援したいから・農地や自然環境を守りたいから食べるのが自然・社会環境に向かう方向である。言うまでもなく、「タコツボ化」は前者の方向と親和性がある。現在の健康ブームは、それにとどまる限りでは、食物を単に身体への健康との関係でしか捉えられなくなり、食を生み出す農業といった自然・社会環境への意識が希薄化する。多くの消費者は「国産だから安全・安心」という意識を抱いているが、いったん「安全・安心」が脅かされる事態が起きれば、科学的に安全とされても、消費者は国内農業に対しても極めて冷淡な行動を取ることがある（原発事故時の消費者の反応など）。食文化の側面から言えば、食に対する消費者の価値観は基本的に利己的であり、自然・社会環境との連携・連帯感は依然として乏しいように思われる。

続く柏〔3〕は、日本の酪農乳業に関する非常に幅広い分析を行なっているが、現在の牛乳乳製品の生産・流通・消費構造は乳文化の未成熟の上に成り立っており、これでは日本酪農に将来はないというのが主張の主眼である。類似の主張と異なり、柏〔3〕の主張がパワフルな点は、日本における未成熟な乳文化は、牛乳乳製品消費の歴史の短さというより、酪農乳業界の行動と戦後の農業政策によってもたらされたことと論じていることである。具体的には、UHT牛乳による市場の席捲、牛乳悪玉論が跋扈（ばっこ）する背景、輸入飼料に依存した加工型酪農の問題点などが取り上げられている。牛乳悪玉論に関しては、論拠の薄い牛乳悪玉論の拡大は、牛乳を専ら健康に良いという側面からのみ取り上げてきた傾向の反動であるとし、「牛乳は決して他の



清水池 義治 (しみずいけ よしはる)
名寄市立大学保健福祉学部教養教育部 講師

飲食物とは一線を画す、特別な飲み物ではない」と指摘する。表現はやや過激だが、興味深い問題提起と言えよう。

秋津〔2〕の指摘する「食生活のタコツボ化」と柏〔3〕の言う乳文化の未熟さとは、表裏一体のものであると言える。「食生活のタコツボ化」は乳文化の衰退を意味する一方、乳文化の未熟さゆえに「タコツボ化」が促進されていると思われるからである。牛乳乳製品の機能性をアピールするのは重要だが、同時にそれらを生み出す酪農への連帯感を醸成しなければ、安全で栄養があれば輸入物でもいと足をすくわれかねない。

また、乳文化が酪農乳業に関する価値の体系であるとするれば、本来あるべき日本の酪農乳業の姿も積極的に論じるべきだろう。筆者はこれまで放牧酪農やパステライズ牛乳といった「マイナー」なものの評価を曖昧にしてきたが、酪農乳業のあるべき姿に近いものとして積極的に評価したいと考える。ただ、それは柏〔3〕が述べているように、加工型酪農やUHT牛乳を一概に否定することではない。日本の消費者の牛乳乳製品に対する知識（牛乳の殺菌温度など）や、酪農乳業に関する現状認識（放牧酪農が主流といった幻想）は決して正確とは言えず、望ましい状況ではない。現在の日本の酪農乳業があるべき姿からどのように外れているか・その要因とは・どう対応すべきかといった問題意識・価値観をタブー視せず、酪農乳業界と消費者とで共有することが、成熟した乳文化の形成、そして両者の連帯の第一歩と考えるが、いかがであろうか。

TPP締結による輸入食料・農産物の増加が懸念される一方、政府は世界へ輸出を拡大する「攻めの農林水産業」を謳っている。地域農業と地域の消費者との関係、社会的な営みが絶たれれば、食文化の前提自体が崩壊する。フランスなどの事例から感じるのは、モノ化＝工業製品化した輸入食料から自国農業を守る強力な防波堤の役割を果たすのは、食文化そのものということである。食文化に包まれ、その中で生み出される食物の本質を改めて再認識すべきであろう。

【紹介文献】

- 〔1〕石毛直道「なぜ食文化なのか」、石毛直道監修『人類の食文化』（講座食の文化・第1巻）、pp.31-52、1998年。
- 〔2〕秋津元輝「食行動の様相と社会へのつながり―一食の倫理論序説―」『農業と経済』第79巻第5号（2013年5月号）、pp.36-46、2013年5月。
- 〔3〕柏久『放牧酪農の展開を求めて―乳文化なき日本の酪農論批判―』、日本経済評論社、2012年。